

表現主義とヴィーン（その2）

木原俊哉

世紀末のヴィーン文化を論述するには、19C前半の国民・市民への政治的・文化的・社会的意識を述べる必要がある。それが基礎を育み、そして世紀末文化の土台を形成したからである。

I. ビーダーマイアー文化と社会 1800-1848

1806年神聖ローマ皇帝位の放棄、対ナポレオン開放戦争での主導権放棄、1811年帝国の事実上破産状態、1815年（ヴィーン会議）から政治的にはハプスブルグ家を中心としてヨーロッパ全体は一応旧来の絶対王政・旧秩序が回復され、正統主義Legitimismusに基づく大国の反動協調の体制が維持されていた。ヴィーンではメッテルニヒ時代を中心に、自由主義・国民主義運動弾圧の反動政治の時代であった。専制的官僚主義と中央集権化が逆に各地の民族的独自性の確立に繋がり、超民族的なユダヤ人も選挙権・土地所有権以外多くの権利を獲得した。啓蒙主義は政治と宗教においては寛容さをもたらしたが、旧体制維持の考えに同調する官僚・貴族を中心とする保守派による強権政治によって押さえつけられ、行政・法においては専制・抑圧的であった。更に1819年プロイセン関税同盟は、いわば帝国を締め出す形になり、産業革命の一層の進展によって、各国・各地域における経済的格差が顕在化し、これまでの社会システムに大きな変化をもたらした。共同体社会Gemeinschaftから利益社会Gesellschaftへの移行期がこの時代であった。密接な隣人と職業的組合からなる人間的繋がりによる社会、そこで

は互いの競争を避け、相互扶助する姿勢があり、根本の考えに共通性が確保されていた。工業化による関税同盟への対抗でも工業技術力の後進性は明らかで、結果的に生産のシステム変化—家内工業的生産から工業化による失業者の増大、人口の都市流入によって、雇用形態・流通システムの変化、地域の環境的变化が生まれ、地域社会・家族制度、更に都市の共同体社会が緩んでいった。帝国の保護主義的政策と、財政の信用不安から積極的経済政策を取れないことが原因で、そこにロートシルトなどのユダヤ財閥が介在したが帝国の財政は改善されず、逆に税制の強化が、農業・工業生産下落、失業者増加とインフレという悪循環を辿る事となった。自由主義的思潮が、政治参加の意欲が減退し、無力感が広がった。その結果として生まれたのがビーダーマイアー精神である。

1. このビーダーマイアーという語は、ルートヴィッヒ・アイヒロートLudwig Eichrodt(1827-92)が、「Fliegende Blätter」という基本的には政治的な雑誌ではあるが、ユーモアと風刺、更には市民社会と体制、社会と個人、更に個人の趣味・関心を扱った題材を中心としたものの中に掲載した人物に由来する。愚鈍で実直な世俗的かつ俗物的な人物：Gottlieb Biedermeierなる架空人物で、滑稽詩の作者として、法と社会秩序に従順に従わざるえないがそれでも完全には安住できずに半ば反骨的に社会を眺め風刺的に批判せざるを得ない自己の立場を仮託して、語らせている。この語が様式の呼称として定着するのはアール・ヌボーの信奉者たちによって20世紀初めに室内装飾や造形芸術のジャンルで用いられ、その後文学や他

の分野でも1つの時代精神を表すものとして援用された。

2. 国民意識・市民感情：政治的無力感が広がっていたが、それは貴族・ブルジュアジー・市民などの激烈な階級的対立がそれまで無かった事も原因ではあり、自由主義的なブルジュアジーも貴族を打倒することも融合する事もできず、根本にやはり共同体的意識が強かったと考えられる。政治的に行き詰まった彼らは文化・学問・芸術と経済の面へと進む。ウィーンなどの都市部ではこれまでの中産階級や一般市民層は、政情不安や戦争・経済変化から逃げるが如く、自らの快適でgemütlich安定した家庭、それを取り巻く社会環境を確保し、これまでの共同体的良識を基に「唇をひきつらせた微笑」に怒りや不満・悲しみや憂いを隠し、あきらめの状態にすべてを覆い隠していったのである。それがシュランペライSchlamperei（だらしない仕事・生活、自堕落）という言葉に代表され、それは個人主義的傾向を表すもので、帝国の政治・行政・法秩序の守への軽視と一体であった。軽視すれどその秩序には従うという精神は、「諦念」であり現実を鋭く捉えて批判する行動に欠ける事になった。

3. 市民の文化・娯楽としての音楽：1770年代以降のウィーン文化の伝統は残っており、逆に政治的参加意識の凋落に応じて増大した。オペラは勿論であるがこの時期を特徴付けるのはワルツである。その起源については諸説あり、3拍子の比較的ゆったりした舞曲がその元になっていたと思われる。貴族的で優雅ではあるが形式ばったコントダンスやメヌエットなどの宮廷舞曲とは異なり、ステップも自由な素朴で踊りやすいものとしてドレーアーdreher、ヴェラーWeller、シュピンナーSpinner、シュライファーSchleifer、シュタイラーSteirer、レントラーLändlerなどの名称でドイツ語圏各地で民衆に好まれており、これらの舞踊は一括して「ドイツ舞曲」と総称されていた。このワルツはWalze, walzen, wälzenといったドイツ語の「ころがる・ころげまわる・なだれをうって進む」といった「回転・遍歴」を基本的に意味する語から派生したようである。18C末にはヨーロッパ各地で流行し、テンポも回転も速くなるにつれて道徳的見地からその「エロティックな面」が問題とされ禁止された事もあった。それが逆に民衆の関心と参加意欲を招く事

になった。舞踏会Ballは貴族だけでなく一般市民の間でも盛んに催されていた。ウィーンにおいては当時リンク外のVorortの開発は進行しており、そのGürtel内のショッテンフェルダー地区(Schottenfelder Viertel)に4000人収容のダンスホール・アポロApolloが1807年開設され、その他多くのホールが作られた。このアポロ・ホールのためにフンメル(Johann Nepomuk Hummel 1778-1837)もワルツを書いているが、この流行を最も明示しているのがディアベッリ(Anton Diabelli 1781-1858)の仕事(?)であろう。自作の単純なワルツ主題を基に変奏曲を多くの作曲家に依頼しそれを出版しようとした。社交舞踊としての実用的ワルツが演奏目的とした音楽にも拡大され、ヴァルツァーリートWalzerliedの大衆歌曲まで広がり1つのジャンルとして、芸術性と娯楽性をも兼備していったのである。その中心的存在となったのがランナーとシュトラウス・父であった。両者のワルツは1830年代にはウィーン音楽文化の華であった。現状打破のエネルギーを生み出す物ではなく政治的・社会的な閉塞感・無気力を解消する最大の娯楽となった。ここにウィーンの市民の精神が良く示されているであろう。

4. これは音楽に限らず喜劇・風刺劇・道化芝居の作者兼演者による演劇活動に顕著である。この市民精神は、その時々流れ消滅しながらもその「一瞬・一時に光芒を放つ閃き」を持つものを好む、ことであり、思考・感情などの人間的行為を言葉で固定する文学というジャンルでは発展しなかったが、即興性・言葉遊び・風刺など「その場と時」を最大限に利用して自己を表現するものとして芝居・演劇・オペラなどの舞台に関連した場で示された。中心は1776年設立の「王室と国民のための帝国管理下にある劇場」、後のホーフブルク劇場で、演目、役者などすべてがドイツ語圏随一を目指して、市民への文化「教化」の目的を持っており、市民はこの劇場・俳優からすべてを学ぶのである。「このブルク劇場にあるのは娯楽や喜怒哀楽を他者として見るのではなく、自らのものにするために手本として求めて行くのである。劇場にあるのは人生の映像ではなく、人生のほうに劇場にあるものの映像なのだ」とヘルマン・パールは述べている。この国民教化としての演劇の考えは、初期バロックの宗教

音楽におけるカトリック・プロテスタント聖書関連音楽作品による民衆教化との関連性があるだろう。この劇場以外にも多くの演劇や娯楽の「場」が開かれ、娯楽の対象となっていた。

がこの様な帝国での貴族・市民意識の原点は紛れもなくバロック的な意味でのカトリック的精神であるが、現実世界や社会の矛盾に直面したことで国家に関する社会的活動や行動への参加の無意味さを知らされ、自己の世界へと行動半径を縮小することを余儀なくされた結果と考えられる。近代的認識論での自我・個の意識はそれほど明確には確立されておらずむしろ遅れたバロック精神の残滓による共同体帰属意識が優先していたとも考えられる。

II. 1848年三月革命とその後

ウィーン貴族・市民階層の一般的精神状況は、常に本音で接するのではなく、時と場所に依じた臨機応変の対応ができる事が自らの文化的・知的インテリジェンスの根本と考え、都会的マナーを磨き、精神的豊かさを求めた。ビーダーマイアー期の文化的受容の精神と趣味が個人の基本的姿勢であった。が自由主義・リベラル派中心の政治的展開の市議会では、個人・社会全体としてウィーン精神にとっての「外観・見栄え・荘厳さ」と共に、軍事・帝国主義的市政よりも自己の世界としての公共性が重視されたのである。心地よく *Gemütlichkeit* 自己も社会もそれぞれに日々経過してゆくならば現世的生活としては最上という理想を持っていた。いわば耽美主義的姿勢であると共に個人主義的傾向を増大させていった。がそれは現実を直視し、事ある場合には決断不能の事態に陥る危険を孕んだ自己欺瞞でもあった。

1. 社会生活と文化・娯楽：18世紀初めには生まれたカフェCaféの伝統は現在も引き継がれているが、当時は情報収集の中心・文化施設であった。後に文学カフェとして有名になる1847年開店のグリーンシュタイドル *Griensteidl*、現存のものとしては1840年創業のハプスブルク家御用達のハイナー *Heiner*、リンク最初の1861年開店のシュヴァルツェンベルク *Schwarzenberg*、ツェント

ラール *Central*(1886)、など多数の店が、市民の好みに応じて個性化し、又多くの文学者・芸術家・ジャーナリストも仲間との会話と社交から情報を得、そこで仕事もしていた。その会話は、政治的問題やら多岐に亘ろうが、「カフェ」の性格と時代背景からすると、建設的なものよりむしろ現状に対する不満と批判精神から生まれるものであり、現状からの逃避として芸術や個人的・社交的世界へと展開していったであろう。そこでもてはやされたのが新聞のネタである。フュトン・フュトン (*Wiener Feuilleton*) というカフェで読まれた各新聞の文化欄である。ここでは一般的文化現象が批評的に淡々と論述されるだけでなく、筆者の主観的考え・当意即妙・ウィット・ペーソス・風刺などの様々な要素の混在したエッセイ兼意見陳述・感想など多様な物であった。ノスタルジアを基調にしながらも常に新しさをも求めていた。ジャーナリズムの影響力が非情に強くなっていた。既に80年代新聞では社主・ジャーナリストの7割がユダヤ系に占められていた。

2. 音楽：なによりも好まれたのはワルツ・ポルカに代表される舞踏音楽と、オペレッタであった。中心はシュトラウス兄弟であった。シュトラウス II (1827-99) は63年には宮廷舞踏会音楽監督に任命され、更に56-86年には自己の管弦楽団を率いてヨーロッパを巡演した。ヴィーン趣味の洗練さが重要で、これまでの宮廷・貴族を中心とした音楽文化ではなく、新興経済エリートの好みと時代意識に応じた素材が求められた。ケルン生まれのユダヤ・ドイツ系作曲家オッフェンバック (*Jacques Offenbach* 1819-80) の作品が58年に上演されて以来 *opéra comique* 仏語舞台作品が定着し、彼から影響されて、生っ粋のヴィーン・オペレッタがズッペ (*Franz von Suppé* 1819-95) から生みだされる。多民族国家のハプスブルグに適した題材の平易さと「その場での楽しみ」という唯美的・快楽提供の素材としてオペレッタとそれに類する作品を多数作曲した。ヴィーンの音楽文化の1つのスタイルの確立であった。音楽はまず娯楽の対象であった。

Ⅲ. リング・シュトラセから「万国博覧会」(1873) とその後

1. 1857年、都心部をかこむ塁壁ならびに要塞、その周辺の壕を撤去する事を許可する新しい都市計画の導入を命じた皇帝の親書が新聞に掲載された。これによって都市の本格的改造、拡張計画が端緒に着いた。これは大きな発想の転換であった。が帝国は軍事力とその外交的・政治的力を実質的に急速に失い、威信回復不能の状況に陥り、政治問題では孤立化していった。経済の動向はヨーロッパ全体で一層流動化・グローバル化していった。それに対応するには首都ウィーンは余りにも前近代的・バロック的都市であった。改革の気運の中心は、自由主義的・合理主義的な知識人・経済人、啓蒙主義的の学生であった。土地開放による売買の自由化による流通経済の積極的導入と、それを支える金融資本の基盤整備が行われたことで、ここに実利的価値、経済的利益を自らの才覚で獲得していこうとする実利主義による合理・功利主義的な市民層が活発に行動した。これまでの国立銀行(1816設立)、貯蓄銀行(1819)の他に、1855年長期資金投資によって産業と貿易を発展させる目的でクレジット・アンシュタルトKreditanstalt(信用)銀行が創設され、ロータシルト、シェーラー、ガイミュラー、などの私立大銀行とともに工業・商業資本の支援に関わった。67-73年の創業者時代Gründerzeitと呼ばれた景気上昇の基礎となっていた。

新しい経済的市民層が誕生し、彼らは自らの置かれた「場」・現実の都市空間を十分に意識し、その場を十全に利用できるよう変革を望んだのであった。それに答えた皇帝に対しては、賛美を捧げそれが後の帝室と市民との連帯感醸成に繋がっている。彼らは時代風潮を反映し、経済改革とその発展の可能性、科学技術の進歩、経済圏の拡大など、「絶えざる進歩の可能性」を信じ、帝都ウィーンの都市改造、新市街区、リングシュトラセとそれに付随する公共施設の建設に財政的にも積極的に関与していく、自由主義経済を信奉する経済的エリートであった。

19世紀のウィーンは、強大な首都としての軍事的機能

を併せ持つ帝都としての存在から、開かれた世界都市・メトロポールへと近代化していった。王権の衰退と自由主義の拡大は相反していた。ブルジョア市民階級は、近代産業経済へと移行するなかで、自らの経済力、社会的地位を高め、自己の価値観を明確に示そうとし、政治的発言力を強めていった。そのことは環状道路(1865年5月1日開通)沿いの種々の建物・公共建造物モニュメント建設期(1850-1910)に示されている。ウィーンでは伊・仏より50年遅れて17C後半にやっとバロックが始まり、18C初めになってバロック様式の宮殿Vorstadt Palaisや教会建築が盛んに建てられ始めた。これは建築だけでなく他のジャンルにも波及し、その後多くの影響を受け入れるが伝統的ゴシックとバロックを融合・受容という精神から、更に新しいものまでも受け入れるという将来に「バロック精神」が19Cビーダーマイア一期以後に定着していた。そこには宮廷貴族によるある程度の「他文化の受容」とフランスへの対抗意識という一貫性があった。この時期でも受容の精神から各建物の統一性は図られず、ルネサンス、ネオ・ゴシック様式による歴史主義的な美を重視する建物と、ヴァーグナー(Otto Wagner 1841-1918)に代表される合理的・機能的都市形態における建造物、という歴史的景観と都市機能の実利を求める計画が混在していた。建物の基本的性格に応じて建設された結果、様式的に統一が取られていない。その根本にはウィーンは帝国の巨大都市Megalopolisであり、それにふさわしい不滅・不朽性Monumentalitätを持つ建造物Monumentを建てる必然性があるとする旧体制的思考が一方にあったが、産業革命が都市構造を根本的に変革した。農村型地域密着の旧来の経済構造から工場生産・大量運搬による広域型の物品移動による流通経済の変化によって、変革は景気の上昇に支えられて進行した。又懸案であった良質な湧水を利用する上水道施設建設(73年完成)、ドナウ河治水工事・ドナウ運河Donau Kanal建設(73年完成)によって、ドナウ河を大型船舶が航行可能となり水上交通が活発になり産業界に恩恵をあたえた。更に帝国と市当局による最新技術を取り入れた公共事業、路面電車Tramや道路整備、治水工事から生まれた新しい市街区における建設などが経済に大きなインパクトを与えた。

農地の割譲や銀行活動の自由化など新興市民エリートの経済活動を支援するシステムが整えられ、都市の日常生活環境・機能の向上へと進んだ。

2. 万国博までの建設とその精神：70年に3年後の万国博覧会開催が宣言され、都市改造・拡張計画は一層拍車がかかり、建築ラッシュへと突入していく。リンクシュトラーセ沿いの建築の多様性はヴィーン市民の文化受容の歴史が反映されていると考えるべきであろう。その事業主体と支援組織がヴィーン市民階層・新興経済エリートであり、彼らの文化的許容度の広さでもあるが、一方で経済的発展に基づく楽天主義的思考、現世を劇場空間とみなしそこでの享乐的現世肯定の姿勢、耽美主義とも繋がっているであろう。彼らにとってメトロポールとしてのヴィーンはあらゆるものを受け入れる事が出来るという意識、旧市街におけるヴィーン独自の文化・社会的意識とは切り離して新たなものを貪欲に受け入れようとし、それが対外的な帝国の政治的衰退は明瞭であるが、それを補い自らの発展に繋がると考えた自由主義的新興市民層の姿勢である。が様々な様式の建造物を受け入れる事は、逆に基本的な「固有文化」を持つ旧市街支配層に対する対抗意識の表明であろう。彼ら新興経済エリートにとっては、旧来の宮廷貴族階級の存在は厳然たるものであり、いくら叙勲と爵位授与が形骸化し多くの市民が叙爵されたとはいえそれまでの階級的相違は歴然と存在していた。彼ら新興貴族と市民層にとっては「発展と楽天的自由主義の精神」を標榜すれど自己の確固たる固有の基盤が無く、またそれを築き上げる余裕も無い故、「過去」の文化遺産に頼る事になった。ここに「様式なき様式」としての建造物群が生じたのであろう。そのことはヴィーンという都市文化が全体としての統一的規範と秩序を持った帝都としての存在ではなく、各階層独自の諸活動の場となったことであり、自己の発言・活動の自由と可能性によってすべてが可能になりうる開かれた都市空間であった。

3. 73年の金融恐慌：万博開催宣言からはまさにヴィーンの経済・文化の諸ジャンルの躍動期となった。貿易、金融機関、Gründerzeit時代に設立された実体ある会社と土地転売などの機関投資家などによる様々な組織が活発な

経済活動を行っていた。土地投機と株式売買の投機など、「紙上に書かれた単なる文言が価値を持ちそれが一人歩きする」といういわば観念的市場原理がまかり通り、それが自由主義経済理念の典型であり、金融・経済の自由化の理想的形態とされ、この自由主義がヴィーンの繁栄を実現していった。反論する市民層は多数に及んだが、投機ブームは急ピッチで万博開催を目指して進行した。

「泡沫株式会社」が多数設立され実態からかけ離れたマネーゲームが行われた。その結果73年5月9日万博開催の9日目に証券取引所ではほとんどの取引引きが成立しないパニック状態「砂上の楼閣・バブルの崩壊」に陥った。これまでの好景気は頓挫し、投資家・実業家・企業は大打撃を受けた。この事件はヴィーン子にとって帝国神話がまた1つ消滅するほどのショックを与えた。発展を一身に担ってきた市民階層ブルジュアジーの自由主義とその価値観が一気に崩壊したから精神的衝撃は経済のレベルだけでなく、彼らのあらゆる面にも影響を及ぼした。特に金融恐慌では、そこに至るまでの過程で多くのユダヤ人が金融・財務の面で関連したことで、彼らへの反発と妬み・憎悪が増大した。これまで以上にユダヤ人の社会的地位と影響力が強くなり、そのことが反ユダヤ主義を激化させることとなった。これまでの宗教・民族的問題、同化し社会に受け入れられてその中で活動する存在としてのユダヤ人から、経済的なことがメインの新興経済エリートとしてのユダヤ人の存在が加わり、更に東方ユダヤ人の大量流入問題もあり、一層複雑になっていった。

IV. ヴィーンにおけるユダヤ人問題

世紀末のヴィーン文化を扱うとユダヤ人問題は避けて通れない。元来帝国はユダヤ人にとってかなり寛容であり、ヨーゼフ二世による1781年の寛容令によって居住、商業活動、教育の自由が確保され、1849年には選挙権、土地所有の権利も認められ、国家による制約・権利限定はほぼ撤廃された。それ以前にもユダヤ人はこれまでに触れたように帝国の様々な主として経済の領域で「同化ユダヤ人」として活躍していた。「同化」は基本的にユダ

ヤ教からカトリック（ないしはプロテスタント）に改宗しドイツ語を母語としそのもとで教育を受け生活習慣などすべての面で自己のアイデンティティーがドイツ化されたユダヤ人を意味する。

1848年以前にも軍の御用商人や宮廷の金融業者としての功績で100人以上の貴族が存在していた。50年以降経済発展によって新興ブルジョアジーと資本家、慈善家や、文化人・学者などのこれまでの中・下層階級とされていたユダヤ人が300人以上も貴族に列せられ、叙勲乱発・爵位の安売りに乗って様々な形態で帝国の中枢に食い込み特権階級へと迫っていった。がこれまでの名門宮廷貴族・特権階級とはやはり階級相違が厳然として存在し、特に好んだ文化的生活としてのサロン活動においても旧来の貴族は血族的伝統による自己の世界を守り、一方新興貴族はより開かれたサロンを開催していった。後者は経済力と自己に対する自信と進取の気概に溢れていたが、前者は一概に閉鎖的階級の存在とばかりは言うことが出来ないが政治的なコンプレクスと挫折・それによる諦念に取り付かれていた。従って宮廷貴族は新興市民層を徹底的に拒否したのであった。この時期から一層ユダヤ人の社会的進出は目覚しくなる。彼らの演劇、音楽、造型芸術、評論・文学などの文化生活におけるジャーナリズムを含めた創造的・批判的活動、学問での独創的仕事は際立った業績をあげることになった。これまでの文化のパトロンであった宮廷と貴族があらゆる面での発言力を低下させていくのに対して、新興市民層がその役割を十分に果たし始めたのであろう。自由主義的思想の恩恵であり、それを最も受けたのが新興市民層であり、その有力メンバーがユダヤ人という構成になっていた故、1870年代以降において急速にユダヤ人の社会的・経済的・文化的比重が増大していった。ではそのエネルギーのルーツとはなんだろうか？

1. ユダヤ民族の特殊性

宗教と教育：世界宗教としてのキリスト教とは異なり、ユダヤ教は民族宗教であり、そこに民族的自己同一性が確保されていた。同化するしないに関わらず彼らはユダヤ的なものを常に引きずっていた。タルムードTalmud(ユ

ダヤ律法学者の法典と口伝・解説の集大成)の学習は規範と現実世界の具体的事例とを、の宗教的・道徳的適合性あるいは整合・禁異において、検討作業を行うことで、これによって論理的思考の訓練と論述能力に役立った。又神の概念についての思考は、具体化・偶像化されうる存在ではなく、無限に求めていく存在として抽象化されているから、神学の問題は先鋭化された思考力を育むものとなった。選良された民が長らく抑圧状態にあることから、民は常に神を求めるが、神は現在においても民に手を差し伸べてはくれない、という非情な考え方を生み出すことになった。それが逆に家族・親族を含む民族共同体的社会の互助システムを生み出したのである。言語教育としてヘブライ語の基本的な事柄はラビにより宗教の戒律や儀式に関することと重なって教えられ、イディッシュ語と共にバイリンガル以上になっていた。この言語能力は帝国の多民族国家においては大きなメリットであった。ヘブライ語の特殊性から言葉の多義的使用が可能で、語呂合わせ・言葉あそび・二重の意味での言語の使用といった事に彼らは長けていった。がこれは単に言語から由来するものではなく、社会的抑圧からくる屈辱感を巧みに隠蔽しそれに屈していない事をアピールするための手段ともなっていた。笑い話・小話や風刺・揶揄などの言葉の世界にいわば逃避し現実を忘れようとするか、痛烈に批判しその影に隠れるのである。現実と非現実・夢想の世界が共存しむしろ永遠の幻影の世界へと移行したい願望が強くなる。それは現実における社会的不安感に基づくもので、それから脱却するには現状打破の精神であり、その第一歩が知的訓練・教育であった。ユダヤ人にとって自らの祖国が失われ常に収奪の危険に晒されていた故、彼らの依って立つ場は狭い地域共同体であったが、そのゲッターから脱出するには収奪されることのない教育を受けた知的エリートとして経済分野や、他の知的専門職を目指すことであった。

ウィーンの19C以降の経済的発展が、彼らユダヤ人の望む教育を受ける可能性をほぼ完全に充足させた。ウィーンに出て数世代経ち同化したユダヤ人にとっては成功し名を成すと、教育の重要性は明確に認識していたが、元々のユダヤ的意識は次第に希薄化していった。従って

金融界に属するとを問わず文化人などではグリルパルツァー(曾祖母がユダヤ系)、シュトラウス一族、ホフマンシュタールなどの多くの人々は、ドイツ化していることで自己の出自に対してそれほど強烈な意識は持たなかったであろう。が遅れてヴィーンに移り、しかも中・下層階級のユダヤ人、あるいは1850年以降にきた東方出身のユダヤ人には色濃く残っていた。

1857年にはヴィーン在住のユダヤ人はオーストリア全土のユダヤ人の1%、ヴィーン人口の2.2%にあたる6200人程度であった。が60年代のチェコとハンガリーなどの非ドイツ系地域における民族主義的運動や経済発展に起因して多くの東方ユダヤ人がヴィーンに流入した。70年には4万を超し、80年にはヴィーン総人口の10%を超える7万以上となった。そしてヴィーン大学医学部学生は1880年38%、1893年48%、教員も80年末には48%、法学部でも80年学生23%、教員約20%となっているし、弁護士57%、ジャーナリストの42%、そして商人の60%ちかくをユダヤ系が占め、更に1900年には147,000人、人口比8.8%にまで急増した。大資本家としての一握りのユダヤ人から、ヴィーン経済を根底で支え支配していた層、近代化の時代を反映する職業としての知的能力が重視されるアカデミック・専門職の層、そして無産階級の貧しい出稼ぎ労働者としての東方出身ユダヤ人まで混在していた。が、この最後の層の1850年以後の大挙帝都侵入は大いなる脅威であった。階層社会においては上層では年月をかけてそれぞれの「棲み分け」が完了していたが、急激な自由主義の浸透による経済的新興市民層の成立によって、階層間格差と社会体制自体の変化がもたらされた。各階層の職種においてユダヤ人の進出は大きな脅威として受け止められた。競争原理に応じてこれまでの職人・商人の共同体的社会システムにユダヤ人が侵入し、地歩を築き着実に発展させていった。当然の結果として反ユダヤ人思想が再燃してくる。

反ユダヤ主義 (Antisemitismus) は、「神殺しの民族」としてのユダヤ人嫌悪・ユダヤ教嫌い (Judenhaß) という民族・宗教的なものではなく、むしろこの時代では経済的利害対立という次元の異なる問題を生み出していた。彼らユダヤ人は同胞との連帯を生かして行商から銀

行業務にまでいたる経済活動につくか、医師、ジャーナリスト、法律家、教師などの知的専門職、あるいは芸術家を目指した(80年代のギムナジウム在籍生徒の1/3がユダヤ人であった)。それがゲッソーからの脱出方法で、経済・文化における進出は更に大きくなっていった。帝国は寛容であったが、宗教集団としてのユダヤ民族を民族として認定せず、ただ「国民」として居住と生活権がこれまで同様に認められている存在としかユダヤ人を認知しようとしなかった。宗教としてのカトリシズムが最大要素であり、その範疇に入らない存在は認め難いもので、多民族であっても宗教的にカトリックであればそれは普遍性の最低レベルを構成する要素として容認される。その意味で宗教的「同化」は大きな要素であった。これまでのキリスト教教徒とユダヤ人の確執はユダヤ人の西欧化の過程で熾烈な経過を辿っていた。故に反ユダヤ主義が拡大するにつれて、同化ユダヤ人資本家・ブルジュアジーと帝国の関係は変化し経済的問題において一層緊密な関係になった。ユダヤ人資本家が国際資本家として帝国の経済に大きな影響力を持っていた現状では、同化上流ユダヤ人階層の意識は、自己の出自に対する「自己嫌悪・憎悪」から宮廷の寛容の精神を自らの存在の拠り所・避難所としていわば自らの帰属しうる場として利用せざるをえなくなり、相互に関係が密にならざるをえなかった。ユダヤ人自体が同化問題で分裂し、大きな階級間格差があり、そのことが又ユダヤ人同士の相互不信をも招く事にもなった。このような自由主義的思想のユダヤ人に対立し、時代思潮のドイツ民族主義を訴える政治家が輩出するのも当然であった。詳述するスペースが少ないので簡単に述べる。

2. シューネラー (Georg von Schönerer 1842-1921) は、叙勲された新興ブルジュアジーで金融界・経済界や帝国官僚組織ともつながる父を持ち、極右的な貴族的保守主義にも感化された。73年の議員活動開始期には自由主義的立場に立っていたが、79年の選挙綱領では反ユダヤ主義が明確化された。自由主義的民族主義から自己の基盤を保守しようとする左翼的立場へとラディカルに転身していった。その背景にはユダヤ的経済組織に対する反発、資本主義的自由経済に圧迫された農民や一般市民

層、特に職人・手工業者、伝統的商習慣とそのシステム存続を求める層が彼の支持基盤であった。84-85年の北方鉄道の国有化問題において、帝国の自由放任姿勢を激しく糾弾し、反資本主義、反社会主義、反自由主義、更に帝国の他民族融和に対する政策に反発して反ハプスブルグ皇室、反カトリックの姿勢を見せ、ドイツ民族主義的運動を展開した。その標的となったのがユダヤ人でありその社会的役割であった。ロシアにおける組織的虐殺ポグロムPogromを避けて移住してくるユダヤ人の脅威を攻撃的・威嚇的に訴え多民族国家の統合的原則をすべて否定し、ドイツ民族主義を基に社会を分裂に導く要素を声高に唱えた反ユダヤ主義を鮮明にした政治家はこれまでにウィーンには存在しなかった。攻撃的故に、ウィーンの伝統的な貴族文化を基に、特にビーダーマイアー期の文化に見られるような帝国の偉大さを背景にしたある種の優雅さ、あらゆることを飲み込める懐の広さ・寛大さ、帝室に対する親愛感、更には自由主義的経済を求めた市民層の寛容さというウィーン精神からは次第に疎んじられていった。「シェーネラーの積極的な仕事の中心は、旧左翼の伝統を新左翼のイデオロギーに変えたことであり、彼は民主的な大ドイツ民族主義を人種的汎ドイツ主義に変形した。ルエーガーが行ったのはその反対だった。彼は旧左翼のイデオロギー—オーストリアの政治的カトリシズム—を新左翼のイデオロギー、キリスト教社会主義に変形したのだ。シェーネラーはその地方選挙区の練達な組織者として出発し、少数の狂信的な追従者を都市にもつアジテーターとして終わった。ルエーガーは都市のアジテーターとして出発し、都市を征服し、ついで地方に安定した地盤をもつ大政党を組織した。」(注ショースキーP171)特に反カトリック主義を標榜したこと、ハプスブルグ家のゆるやかな統一の原点であった宗教・カトリックに異議を唱える事は、彼の主張を受け入れられなくする最大のデメリットであった。

3. ルエーガー (Karl Lueger 1844-1910) は下層中産階級に育ち官吏養成学校70年学位を取り自由派の弁護士として活動を始めた。がハンガリーとのAusgleichは相当なショックとなる体験であったものの必ずしも民族主義へと直結していかなかった。ウィーン市議会に75年所属し、

自由主義的考えから庶民階級の社会的地位向上のため、選挙権拡張運動に励んだ。この運動を通じて彼は自由主義的秩序全体に対する弱者・下層階級の社会的不満を熟知し次第に左派化していく。元来自由派であったが、庶民の民主的不満を経済的羨望とみなし「利権」を持つ金融派閥・金権勢力への闘争へと進み、下層職人階級との連帯感から支援を受け、85年帝国議会議員になった時には「国際資本」とユダヤ財閥に対する闘士として、更に87年のシェーネラーのユダヤ人移住制限法提出を支持して反ユダヤ主義を明らかにした。彼はシェーネラーほど急進的でも、又汎ドイツ主義でもなかったし、宗教的にもカトリックを守りながらも平等の原則を守っていた。が急進的反ユダヤ運動の中・下層階級職人から改革を求めた教会組織、穏健な聖職者および自由派までを団結させキリスト教社会党を93年に結成した。「ばらばらな反自由主義的要素、彼の経歴が進むにつれて互いに矛盾する方向に動いていた民主主義・社会改革・反ユダヤ主義・ハプスブルグ家への忠誠という要素を統合できるイデオロギーをルエーガーに与えたのは、カトリシズムであった。」(注ショースキーP178)自由主義を経て日和見的ではあったが、ウィーンの多くの層の支持を得た。そして大ブルジョア有産階級の権利・利権擁護の前市長を破って98年市長になる。彼は一般大衆の支持をとりつけるために、ユダヤ人憎悪の感情を巧みに選挙戦術に取り入れ、反ユダヤ主義をウィーン市民に根付かせたが、その勢力の爆発までは進行させなかった。彼の反ユダヤ主義は政治目的のためであり、社会的怨嗟を生み出していた階級差別と自由資本主義体制批判をアピールするための一種のプロパガンダであった。彼は下層・中層階級援助のための様々な制度・施設を導入し、バランス感覚に長けた優れた政治家として現在のウィーンの基礎を築いたと考えられる。社会改革を生み出した思想的状況がこれまでのぬるま湯的政治風土に様々な主義・思想をもたらした。

4. 社会主義的政策が行われたのは社会的要請に基づくものであった。その運動の中心人物がV. アードラー(Victor Adler 1852-1918)で、初め熱烈なドイツ民族派として活動する医学学生で、汎ドイツ学生連盟に加入していた。

医療活動の実践を通じて88年に社会民主党をまとめあげ、その後ルーエガーのキリスト教社会党と対立しうる政党へと導いた。彼はプラハ生まれの同化ユダヤ人でありながらユダヤ人としての自己憎悪は生涯消えず、反ユダヤ主義の姿勢を取った。ロンドンでエンゲルスと親交を持ちマルクス主義に触れた。党の指導層にはユダヤ人が多く、ボヘミア出身のバウアー (Otto Bauer 1881-1938)、M. アードラー (Max Adler 1873-1937) などの優れたユダヤ人理論家が輩出し、民族紛争調停、労働者教育・待遇改善などのマルクス主義的社会改革運動を展開していた。が彼らの出自は中産階級であったから、貧窮・労働者層との一体感を持ち得なかった。むしろユダヤ社会に受け入れられない自己の存在を、社会から疎外され抑圧された階層と重ねあわせて捉えていたのである。根本的に彼らはハプスブルグ帝国の基本的枠組みを**守**り、それを支えていた官僚制度に安住していたのであった。階層間格差を明確に政治的に意識する事無く、しかも自己の出自に関して明確な姿勢を提示しない事は当時の反ユダヤ主義旋風の中では事無かれ主義的にならざるをえなかったであろう。この考えはインテリ・ユダヤ人に典型的な考えで、元のユダヤ的本性に戻れず又「ドイツ的なもの・ドイツ性」を十分に獲得していながらも「アーリア人」として受け入れられないことで「自己憎悪」し、しかも同化していないユダヤ人と同格に扱われる事に猛反発し、同胞への憎悪を持つという、将にユダヤ人であることによる自己撞着の典型であろう。彼のもとでヴィーンに社会主義が定着しなかったことも関連しているであろう。

5. がこの反ユダヤ主義は、シオニズムZionismusを生むことになる。その中心がTh. ヘルツル (Theodor Herzl 1860-1904)であった。同化ユダヤ人の商人の子としてブタペストに生まれ、ハンガリー社会においてもドイツ系ユダヤ人として少数民族であることを感じ取っていた。ヴィーンのユダヤ人地区レオポルトシュタットに移住し、ヴィーン大学で学ぶが、ヘルマン・パールやフリートユング (Heinrich Friedjung 1851-1920 同化ユダヤ人でドイツ民族派の歴史学者) と共にドイツ民族主義の学生運動に加わっていた。フュトンに寄稿したことがきつ

けとなってジャーナリズムの世界に入る。その一方でドイツ的価値観と美的教養を身に付けていった。それが知的職業による地位向上への手段でもあった。フュトンにおける即興的機智とウイットと鋭い社会・文化風刺によってヴィーン・ジャーナリズムの唯美的傾向と良くマッチしていた。91年にはフュトンの名手シュピッツァー (Daniel Spitzer 1835-93) の後任におさまった。芸術・文学においてはあまりにも主観主義的で貴族志向であったのであまり高く評価されなかったし、自らの出自を意識すれば必然的に社会的・個人的挫折感と孤独感に陥ることになったのであろう。

91年「新自由新聞Neue Freie Presse」のパリ特派員となり、政治的自由主義の限界を感じ取り、法と道德による社会的秩序維持機能が迷走していると考えた。経済的には政治的混乱を反映して停滞していたフランスにおいても、寛容には限度があり国際資本と結託しているユダヤ資本と民族への反感・憎悪から反ユダヤ主義が急速に高まっていった。その頂点が94年の自らと同じ同化ユダヤ人ドレフュスのスパイ裁判で、それを契機にしてこれまでの理想主義的な同化主義を捨て、行動する知識人、主体性をもってユダヤ民族のために努力するユダヤ人を目標に積極的に活動していく。ユダヤ人は自らの努力によってゲットーを脱出すると、キリスト教徒中産階級と競合関係に置かれ、それを克服し非ユダヤ社会で成功すれば貴族的価値観と教養を持つ同化ユダヤ人となった。失敗という不安感に常に苛まれていた。それは自己の出自に対する憎悪にまで鬱屈したこともあり、また同胞の惨めな状況を見る事で反感から自己嫌悪にも陥った。これがユダヤ人の知的エネルギーのもとにもなっていたであろう。又西欧ユダヤ人の反ユダヤ主義への無関心にも落胆したことでヘルツルは、宗教集団としてではなく民族集団としてのユダヤを建設する夢を持ち実現へと進んだ。96年「ユダヤ人国家Der Judenstaat」を出版し、97年バーゼルで第一回世界シオニスト会議を開く。ここから世界シオニズム運動が広がっていった。同じユダヤ人であるカール・クラウスはこのこの書物を揶揄したし、正統派のユダヤ教からも批判され、最も激しく反発・拒否したのが上流階級の自由主義的ブルジュアジーの同化ユダ

ヤ人であった。彼の考えは必ずしも全面的支持を得たわけではなかった。が96年「新自由新聞」のフュトン編集者、99年編集長になると、世論のオピニオン・リーダーであったユダヤ人編集局長ベネディクト (Moritz Benedikt 1811-1920)の反シオニズムの立場にもかかわらず、この運動にのめり込んでいった。そしてシュニツラーやシュテファン・ツヴァイクなどにも活動の場を与えた。大衆へのアピールや言論の場での発言だけでなく、皇帝、法王、権力者・支配者達への積極的な政治活動を繰り広げた。そこには東方極貧ユダヤ人の西欧への大量流入が、ロシアでのボグロムの再現を生み出すのではないかという危機意識にも促されていたのであろう。

そして民族として認知されていなかったユダヤ人の「自己存在・アイデンティティ」追求、ユダヤ人相互の民族的・宗教的意識の差異、社会体制と民族問題、といった問題はかなり深刻なもので、知的エリートに「自己の出自への憎悪」を生むほどに社会的圧力が強かったのである。

V. 世紀末・転換期の文化

1. 分離派 *Sezession* : 20世紀冒頭における諸芸術のモダニズム的傾向を持つ都市は数多くありそのジャンルも多岐に渡るであろう。絵画・造形系ではやはりパリが別格として存在し主流となっていたであろうが、ウィーンも又1拠点であった。その代表がG. クリムトを会長とする1897年における「分離派」の結成である。彼らは旧来のアカデミズムに縛られた観念から離れ、諸外国における芸術発展との活発な関連に求め、その中から自己の置かれた状況を冷静に見つめたうえで、自己表現を追求していった。W. モリスなどの新芸術運動、ラファエル前派、象徴・印象主義派、ユーゲントシュティル *Jugendstil* のミュンヘン・グループなどからの相互的影響下で独自の表現スタイルを確立していった。がリンクシュトラッセの建物建設時期に一世を風靡したマカルト (Hans Makart 1840-84)の題材を過去の歴史に求めた大作の擬古典主義な歴史主義的な装飾・絵画からも大きく影響されていた。マカルトはこの建設期の精神の具体的事例で

あり、市民層の嗜好とファッション・モードの先端を行く存在であった。彼らに共通する要素として耽美主義が明確に認められるが、分離派には近代性との相克が認められる。が他のグループとの相違は社会との関係にあり、モリスは芸術と生活の融合を目指して社会参加による芸術との連帯と社会改革的意識をもっていた、又仏グループ、ミュンヘン・グループにも根本的に反ブルジョア精神・反体制的精神が認められる。がこのウィーン・グループはその都市と彼らの置かれた環境によって他のグループとは異なっていた。i) 帝国の経済的発展と富裕なブルジョアの支援によって安定した階級に属していた。

ii) いわば特権階級との接触によって一般社会との連帯が欠如していた。iii) これまでのビーダーマイアー精神を根底にしているが故に政治的に全く無力であった。いわば優越感と無力感がないまぜになった物憂い退廃的・唯美的感受性を、現実と理想の自己観念の世界において表現している。そしてクリムト以後にはシーレ (Egon Schiele 1890-1918)、ココシュカ (Oskar Kokoschka 1886-1980)へと繋がっていく。又O. ヴァーグナーの弟子ー建築家のロース (Adolf Loos 1870-1933)は師の実用主義を徹底し、装飾をに含まれる虚飾を廃した機能主義建築を訴えた。その点でシーレやココシュカの鋭い人間描写と鋭い社会批判の精神において共通し、クリムトとの相違が見られる。

2. 世紀末ウィーンの文学の拠点となっていたのがカフェ「グリーンシュタイドル」、後の「ツェントラル」であり、そこから「青春ウィーン派」ーアルテンベルク (本名 Richard Engländer 1859-1919)、ベーア=ホフマン (Richard Beer-Hohmann 1866-1945)、ホーフマンスタール (Hugo von Hofmannstahl 1874-1929)、シュニツラー (Arthur Schnitzler 1862-1931)、などが輩出する。このグループの思想的リーダーとなったのがバール (Hermann Bahr 1863-1934)でリンツ生まれのカトリック信者、仏、ロシアなど遊学し94年ウィーンに戻り劇作と評論活動を始めた。「倦怠、死と衰微への病的な傾向、折衷主義、気難しさ」と神経質ーすなわち 批評家が『若きウィーン』を攻撃するときの標的となった『デカダンス』は、聖書の民の千年の苦難から生じたものでな

く、ヘルマン・バルが1889年に半年滞在したパリからウィーンにもたらされたものであった」(注H. シュピール P127-8) 彼はドイツ共和国擁立を訴え、シェーネラーと共に汎ドイツ民族主義の運動に関わり、民族主義的、反ユダヤ主義的學生運動のリーダーでもあったが、いち早く象徴主義を紹介し、新しい事に貪欲で、「象徴主義から分離派、表現主義、新バロック主義とかけぬけていき、最後にオーストリアの愛国主義へ至りつく」(W.M ジョンストン P179) というように轉身し続けた。ここにはV. アードラーを中心とする社会主義者も多数出入りする、といったようにこのカフェの果たした役割は大きくかつ多くのユダヤ系芸術家、ジャーナリスト、知識人、學生が接触を求めてここに通った。

更に後にこのカフェの退廃性と虚偽性を鋭く風刺し、90年代のウィーン文学を批判したクラウス (Karl Kraus 1874-1936) も通っていた。彼はボヘミア出身のユダヤ人でウィーンで教育を受け、ジャーナリズムの世界に入り文化欄フュトンに辛辣な批評を寄稿した。「言葉の純粋性と論理性、論理の仮面を被ったまやかしの言語—軽薄で俗受けする文章」という言語の二重側面についての鋭い言語感覚と社会的批判精神とによって、同胞ユダヤ人ヘルツル、「青春ウィーン派」の人々、バルなどあらゆる文学者・芸術家、政治家そしてフュトン自体も攻撃した。が彼にとって時代精神を的確に表現していると考えられたものには好意的判断を下している。1899年「炬火Die Fackel」を創刊し風刺と社会批評を死ぬまで継続し、ヴェルフェル (Franz Werfel 1890-1945)、ラスカー・シュレーラー (Else Lasker-Schüler 1869-1945) などの表現主義的作風の作家を評価する一方、世論をあやつるジャーナリズムの悪辣さを痛烈に攻撃する自己の政治文学をも掲載した。この「炬火」は大衆誌ではなかったが、若い知識層や特に風刺や新思想を求めていたユダヤ人中産階級には大きな影響を与えた。彼にとって重要なのは、文芸の世界において情報と芸術作品を区別しその真の姿を明確化することであった。従って文学にも噛みつき批評をおこなったが、ジャーナリズムについては、同胞ユダヤ人が70%以上関連しているなど全く顧慮せず痛烈で辛辣な批判を繰り返した。自由主義的資本主義のジャーナリ

ズムの世界における言語がどのような社会的影響力を持つものであるのか、本来の言語とその作品とは如何にあるべきかについて、警鐘を打ち鳴らし続けた。彼にはシェーンベルクの「和声学Harmonielehre 1911」も捧げられているし、ロースの主張もしばしば「炬火」に掲載された。虚飾を排除して本質のみを直視しようとする姿勢が連帯を生んだのであろう。

3. 音楽：基本的にウィーン市民にとって自分達の慣れ親しんだ社会的・文化的土壌から生まれたものに対しては新旧すべて寛容に受け入れるが、その範疇を超えると拒否するという保守性が認められる。音楽に高尚とか芸術性とか精神性といったハイレベルのものを求める一方、自らが楽しむものを徹底的に追及した。音楽においては、鑑賞し知的に感激する対象と参加し自らのメランコリーに浸れる娯楽的对象との差、音楽的カテゴリー的差異はあまり意識されず、自らの唯美的趣味の範囲を超えるものだけは拒否した。共同体的環境で習得された教養は精神的内包となり、価値観・倫理観として個人並びに社会に対する意識の根底を形成するものとなり、社会的・物的現実の外的世界と自己の内面世界とを規制するものであった。が内・外の両世界が無理矢理であれ調和へのプロセスになれば安定への目標が達成されたであろう。がこの世界を構成している諸要素が様々な外的要因によって個々の明晰性において個別に意識されるが、それ以上に他のものとの混在とによってその本来の存在も不明瞭になり、諸要素を統合しようとする「意志の統一性」すらが把握されがたい流動体として意識に流れ込んでいくのである。主観性と客観性が同次元で混在し、自我は世界に埋没し他者すらも自我の世界に飲み込み、飲み込まれるのであった。自己の過去の経験に追想しそこから実質的なものを導き出そうとしても得られるものは、現実においては虚的な実体の無いユートピア的イリュージョンの世界であり、実態としての明晰性と純粋性は持ち合わせていない。その世界に没入することはナルシズム・唯美主義そのものであろう。エロスを意識する事はタナトスをも意識する事になる。自己愛・エロスへの没入、他者への意識欠如、自己のための外的世界、はすべて主観的かつ個人的なユートピアのものであろう。共

同体的現実世界から離れ、純粹に自己のみの美的理想郷を求めることは、自己を切磋琢磨させ向上させることにはなるが、その反面理想としてのイリュージョンと現実の乖離を認識する現実的判断を奪ってしまう。主観的経験と学的知識・探求心が自愛の流れに合流し、自我と本来客観的存在であるべき外的世界とが自己の感情世界において自己愛的に統一されてしまうのである。がこの統一・合体は持続性や各要素の論理的・形式的統一性を保持していないし、連続性を生み出す要素・力すら持つてはいない。感受性を刺激する断片の主観的羅列であり、感覚的思考と知的感覚の流動体的形成物となった。そこでは全体を統御する意志、合理的自我、合目的意図による客観的論理的世界構築の意識による創造ではなく、むしろ個人的体験・感情の未分化な連続体が生み出される事になった。その代表がマーラー(Gustav Mahler 1860-1911)で、ナルシシズム的・没主観主義的・唯美主義の典型であろう。画家ではクリムトも同じであろう。これは彼らに限った事ではなくウィーンの文化を体験した世代しかもそこで音楽教育を受けた多くの音楽家に共通のものとなっていた。がマーラーは体制の変革に全身を込めて努力した。が彼もウィーン宮廷歌劇場監督就任の8ヶ月前に突然カトリックに改宗して反ユダヤ主義の反対運動を逃れ、自己の願望達成を目指し体制との妥協を求めた。クリムト・分離派も同様で、自己内部の性向とは別に、自らの置かれた立場をそれぞれの自己主張に基づき発言し、変革を求めたのである。体制と自己との軋轢の強さは強烈なものであり、二人とも10年前後でいわば自己の世界へと戻らざるを得なくなった。

がクラウドに代表されるような辛辣な社会・文化批判の立場がジャーナリズムと学問分野に存在し、微温的環境への痛切かつ攻撃的な叫びとして社会を変革しようという姿勢を示した。社会主義的観念も含まれてはいるが根本は自己の理念であった。「日常の流れに身を任せる事の安楽」への極度の反発・危機感である。「教養と娯楽への安住・社会への静観の姿勢」への警鐘を訴えた。ピーターマイア一期に自己の教養基盤を持ち自己を磨き上げることを重視し種々の文化体験の中から多くを吸収し、そのシステムの中で育ち経験する事は結局現状保存・継

続の保守主義以外にはありえない。移ろいやすい現実、はかなくも居心地よく楽しく過ぎ去って行く日々の日常世界は、無意味な愛と死を無限に繰り返す無目的エネルギー浪費の世界である。

が認知はされるが受け入れてもらえないアウトサイダー的存在としてのユダヤ人にとっては、その世界は常に障害であり、それを乗り越え新たなる自己世界を築くためにはどれほどの努力が必要であったか。現実直視から生まれる苦悩とその克服を目指す精神的行為とによる現状打破の気概は、自己と重ねあわせてその差異を意識すればより一層強烈なものがあつたであろう。が反面激しい対外的姿勢から自己に戻れば相互のギャップの大きさを痛切に実感せざるをえない。「よその」としての自己と他者の境域を明確に意識し自己を確立し、そこから新たに自らの世界構築へと進む。芸術においては、既存体制を打破して自己の表現が、その真実性において、有用性と美が合理的に混在した新たな秩序の形態・世界と合一する事を求めることになる。がその過程においてはこれまでのあらゆる要因とその形態を根元まで分解し、諸要素の存在理由Existenzberechtigungまで突き止め、論理の明晰性において再構築していくという作業が必須のものとなった。

参考文献

- W. M. ジョンストン著. 井上修一他訳「ウィーン精神—ハーブスブルク帝国の思想と社会 1848-1938」みすず書房 1986年
- C. E. ショースキー著. 安井琢磨訳 「世紀末ウィーン—政治と文化—」岩波書店 1983年
- H. シュピール著. 別宮貞徳訳 「ウィーン—黄金の秋」原書房 1993年
- 山之内克子著. 「ウィーン・ブルジョアの時代から世紀末へ」講談社現代新書 1995年
- 海野弘著. 「ハプスブルグ美の帝国—バロックから世紀末へ」集英社 1998年
- A スケッド著. 鈴木淑美他訳「ハプスブルグ帝国衰亡史—千年王国の光と影」原書房1996年
- H. A. キッシンジャー著. 岡崎久彦監訳「外交」日本経済新聞社1996年
- 平田達治著. 「輪舞の都ウィーン—円形都市の歴史と文化—」人文書院1996年
- 上田浩二著. 「ウィーン—よそのがつくった都市」ちくま新書1997年
- 村山雅人著. 「反ユダヤ主義—世紀末」ウィーンの政治と文化」講談社選書メチエ54. 1995年
- 浅井健二郎編訳. ベンヤミン・コレクション2 ちくま学芸文庫1996年
- <附記> 本稿は、平成9年度の塚本学院教育研究補助金による研究成果の一部である。